

歌の周辺

象を見ると、釈迦牟尼を連想することがある。それは、釈迦が古代インドの人だったからだ。（釈迦が小型の象に乗っているイラストを見たこともある。）

釈迦が世を去ってから、すでに二千数百年の歳月が過ぎていく。えんえんと続く永劫の時間の流れの上に、釈迦がいて、象がいて、いま自分がいる。この世のもの全てが、時間というものの中に現われて消え、消えては現われる……そんなことを思ったのが、この歌の生まれた切っ掛けである。

（高野公彦）



(写真・木畑紀子)

高野公彦うた紀行・22

象を見て仏陀思へりはるばると未来へ
流れゆく時間ときの束

——『汽水の光』

【鑑賞】 仏教において象は、釈迦牟尼にまつわる神聖な動物。悠然としたその歩みを眼前に見ながら、作者は悠久の時の流れに「はるばると」身をひたす。そのとき過去は現在と、現在は未来と、未来は過去と重なり、すべてが光り輝くひとつの「束」としてあらわれた。まるで時間の外に出てしまったかのような感覚。もしかすると、これを永遠というのかも
しれない。

(岩崎佑太)